

昭和二十一年初頭、国民政府側がソ連軍に代り満州を接收するに及び、邦人の管理は不自由ながら軌道に乗った。これは蔣介石主席の「恨みに報ゆるに暴を以てする勿れ」という精神の賜である。

〔戦史叢書〕より抜粋)

## 満州では五年兵

### 朝鮮半島縦断帰国

福岡県 神代 国 男

大正九（一九二〇）年十一月二十六日、三池郡高田町大字梅田の農家の次男（兄は幼少の頃に死亡し妹一人）として生まれましたが、父は昭和三十三年（一九五八）年四月二十一日に死亡、母は戦時中の昭和十九年一月に死亡しました。

昭和十七年、母は私が戦友の遺骨宰領のため、久留米連隊に帰って来た時は生きていて喜んでくれたのですが、人の運命などというのは分からぬものだと後に

思いました。しかし考えてみれば、外地勤務で会えぬ、帰れぬのに、一度帰って顔を見せたのですから、幾分諦めはついたのですが、残念でたまりませんし、今でも母のその時の姿を思い出すことがあります。

私は、昭和十六年二月二十二日、大阪の部隊に集合し、三月一日、満州の独立守備第一大隊第二中隊に入隊しました。満州の部隊までは、貨物船で大連へ、列車で奉天駅（瀋陽）に着きました。

第一守備隊の第一・第二中隊は奉天、第三中隊は撫順、鞍山でした。南部防衛司令部には四個大隊編成で、私は第一大隊でした。毎年四個大隊の十六個中隊が、奉天で剣術の試合をやりました。その時代、現役の勤務期間は、内地は二年ですが、満州の独立守備隊は三年間で除隊でしたから、外地であるのに内地より一年間勤務が長い。これは、一応戦地であったからかもしれません。

三月、四月、五月と経過し、一期の検閲が終了すると、もう六月の末には、八路軍討伐のため北支へ行き、三カ月間、初めて戦地の体験をしたのです。その

時は関特演であったので満州へは帰らず、そのままそこにいたのです。

昭和十八年、三年兵になったら、大阪から来た召集兵と一緒にしたのですが、その人達の中には、上等兵であるが、支那事変の功賞で金鵄勲章を持った人もおりました。関特演の時は、満州では一触即発という危機でもありましたから、多くの戦争体験のある人が召集されていたわけでありましょう。

我々は残って、奉天から、フーキンの山に陣地構築をし、対ソ連戦に備えました。フーキンに行く途中には飛行場があり、偽装の飛行機が数機ありました。敵をあざむくためであったでしょう。

陣地構築後、満州国軍と交替したのですが、その時、明治時代の重機関銃がありました。もし、あの時戦闘があれば、恐らくソ連軍にやられてしまったでしょう。私は昭和二十年に朝鮮国境に近い延吉(閔島省)に来ていたので助かったわけです。

終戦の年には、延吉で戦車攻撃の演習をしています

たし、我が第一中隊は「切り込み隊」になっていました。私が、もし前の所で警備していたら、恐らく戦死してしまっただでしょう。

昭和二十年になると、現地召集があつて、未教育の者や年配の子備兵が来しました。ですから隊の内容は、私達五年兵と大阪の召集兵、そして先程申した現地召集の初年兵という編成でありました。もし終戦がなく、ソ連兵と戦っていたなら、損害は多かつたでしょう。

私は五年兵でありましたが、既に結婚をしております。早婚の理由は、親達が兄は子供時代に死んでおり、二男の私が兵隊に行くならば、早く結婚し、子供をつくっておけということで、私が満州へ出発した一カ月後に長子が生まれたのでした。

私が、昭和十七年に戦友の遺骨を持って帰り、慰霊祭が行われた時、我が子と初めて対面ということでしたが、既に二歳となり、私のことを分かるようになっていました。

遺骨宰領がおわって満州へ帰ったら討伐がありません

た。私は帰隊も早々であつたためか、その戦闘には参加しなかつたのですが、同年兵で、高田町から一緒に出た五人のうちの一人が戦死されました。私は、そのために助かつたのです。現在は、五人出たうち三人が生き残っていますので、戦友会を現在もやっております。

終戦の報は、八月十六日に聞きました。朝鮮との国境の山の中、延吉に居たので、一日遅れで知つたのです。そして、武装解除のため、敵に渡す銃の手入れをしました。これは、昔なら「武士の嗜み」、現在なら「軍隊の名誉のため」でありました。

我々仲間同士では、「どうせ日本には帰れないから、馬賊になろう」と話し、「拳銃を三発射つたら一定の場所に集まり脱走しよう」と約束し、三三五五で南下したのです。その時、日本の工兵隊が橋を壊していました。

結局、最初は二人だけでしたが、満州から南下した邦人が多く、その人達は男は召集されて少なく、女性

や子供が多かったです。また、朝鮮人同士で争つたのもありました。

ソ連軍が入つて来て、機械等めぼしい物は持つていつてしまいました。我々は、その労役にも使われませんでした。女性を連れて行かれる人もいたので、ソ連軍に金を渡して帰つてもらつたこともありました。その時、日本人の慰安婦や、朝鮮人、ロシア人の女性も犠牲になり、あさましいものでありましたが、武器を持たぬ我々は、抵抗することもできず、残念でありました。

ロシア軍人は坊主頭でありました。後で聞くところによると、囚人を戦闘の先に立てて、やりたい放題のことをさせていたようでした。ですから、統制も軍規もなかつたのでしょう。囚人として人間ですから、命は惜しいし、刑務所で圧えられていたあらゆる欲望を発散させていたのでしょう。犯す、侵す、略奪、殺人勝手たるべし、ということにもなつていたのでしょう。

朝鮮半島の三八度線には、残務整理の軍人が小人数

残っていました。そこに、体が悪い人々を連れて来ていました。移動は担架では危険なので、我々は集団で移動しました。一人になって行動して、やられた例が多くあったからでした。三八度線の川は、男は全部泳いで渡りました。もうその時はソ連、南は米国が監視していたのです。

南北朝鮮の境で金の交換をしたのですが、だまされて金を取られてしまった人もありました。行動中は風呂に入れない。そのため、女性はしらみで苦勞していました。男は裸になれるが、女性はそうはいかないからです。

我々と一緒に来た在留邦人は、三八度線で、ここまで一緒に来たのだからと、その後も一緒に行動しようということになったのです。金持ちは、金を分散して、他の人に金を持ってもらうということを聞きました。日本人も商売をして金を儲けた人もいたようです。軍人でいたら、シベリアに連れていかれた人も多かったのですが、私は引揚者として帰ったので助かりました。これがもし、鮮満国境の近くでの勤務でした

ら、シベリア抑留者として、厳寒の地で、鉄道設置や、山林伐採、炭鉱での労役に使われ死んでしまったかも知れないと、今になっても思っています。

三八度線を突破した時「どこから来たか」を届けるようになっていました。そのため、通過者の状況が分かるようになっていました。また、収容所もありました。渡河するのに、朝鮮人に金を払って渡った人も多かったといえます。しかし、北朝鮮の金は南朝鮮では使えなかったらしく、また、女性や子供は随分苦勞していたり、死んだ人も多かったのです。

三八度線を越えてからは第一線にいた坊主頭のロシアの罪人が悪かった。その人達は随分悪い事をした。女性も単身だと姦かされるので、夫婦のようにして、子供を連れていて助かった人も多かったのです。

私が帰って来たのは、昭和二十年十一月十二日博多へ上陸しました。私は福岡県でありましたから、線路を歩いて帰りましたが、一緒に連れて来た女性は大牟田へ帰りました。

家に帰りましたら、母は既に昭和十九年に死んでしまっていて、驚いたり悲しんだりしたのですが、子供は大きくなっていました。

私は、入営前から軍需工場に籍があり、青年学校で体育係をしていました。三年勤務をして、昭和二十五年に退職をし、農業をしていました。三十三年から四年間は、新聞販売の店長をしました。

家は農家でもありましたから地元の神社総代をしたり、農協理事を二期勤めたりもしました。長男も大きくなり、家業を継いでくれましたし、次男も自立し生活をしているので、もう安心して生活をする事ができ、幸せであります。

戦時中、私は満州で、丸四年以上、軍人で過ごしていたし、終戦後の満州の状況も不明でありましたから、家では死んでしまったのかと、諦めていたようでした。

私も戦後、シベリアへの抑留等でもあれば生きて帰れなかったかもしれませぬ。

私は幸いにして、子供たちも、先祖の家業である農業も継いでくれたり、自立して生きてくれ、孫は六人、曾孫二人で安心して生活しています。地域の世話役もし、更に我々仲間の恩給欠格者救済運動も二十年やっていて、我が人生を全うしようと思っています。

## ダモイ 青春

滋賀県 国松 清

私は、大正十三（一九二四）年滋賀県栗太郡葉山町に生まれました。昭和十九（一九四四）年四月、県立瀬田工業学校を卒業しました。

その昭和十九年四月から、新しく特別幹部候補生という制度ができて、その第一期生として航空隊に志願しました。そして兵庫加古川の陸軍航空通信学校に入學、一年間、そこで通信の教育を受けました。滋賀県出身のものは六人ほどおりました。その一人の東森栄三君は、守山市の郵便局の近くにいました。そ